

畫本西遊全傳

四編

三



特
遠21
2500
40-33



門 遠の村
2500
40-33

繪本西遊記四編卷之三

岳亭丘山譯

油漬

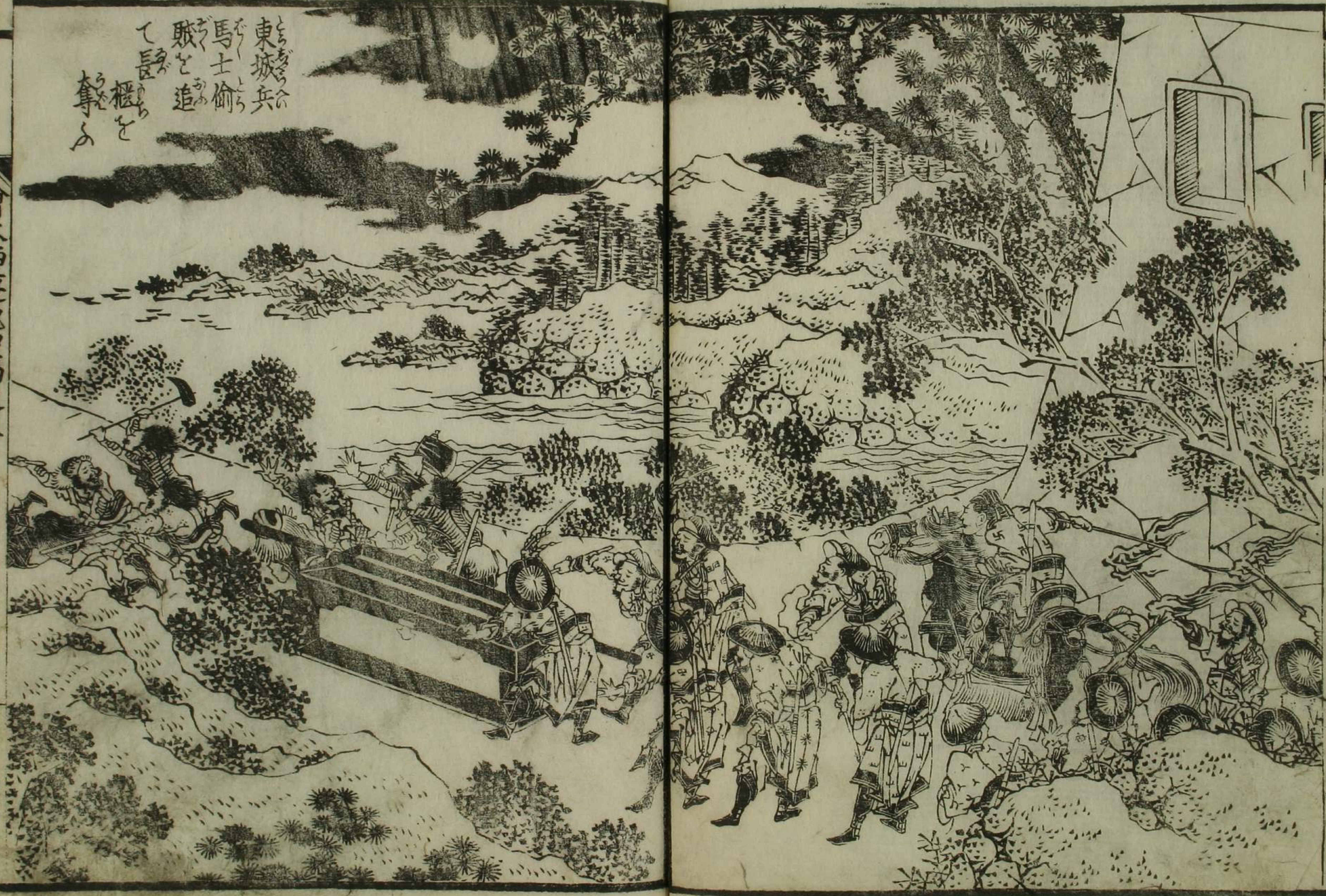
前章の下

行者の寔の賈人と思ひせ和尚と悟とぬ為に欺云くと山豆
計んや這家の裡に偷賊在て今暗小行者が詭言を聞急
門外小走出二十餘個の強偷を引卒未の門扉を破つ
一偷小動と打入るを家内の男女叫び競き四方小散り逃
迷ふ彼強偷们却て家裡の財宝を奪は個々後房の邊
る大櫃の處に至つと彼櫃を繩ひて堅く結ひ住め八九個の偷
賊是を擔ひ亦一個の偷夫白馬を牽出一偷小此家を出
出直小城東に向ひて宛行守門の軍兵を斬殺し城門を出
んと彼處へ巡城總兵官と東城兵馬司と人馬を領し城を



繪本西遊記四編卷之三

東城兵
馬士偷
賊と追
て長
奪を
ふ



終本史記言山録文二

巡りて飯り来りしと偷賊と見よるも夫道にを指揮するは偷
 賊の大小の驚き交勢小敵なる更能に四散小成て逃去け
 つ官兵の偷賊が捨置て去る彼大櫃を見ては何等の
 物ぞと知れ旦明旦朝小奏聞して後小此櫃を開くべしと
 兵士輩に分けて白馬を牽せ大櫃を總兵府の裡小櫃さへ
 させ置其夜の大家安歇する以時三藏櫃の裡小在る是
 同大の小驚き消々に行者小云けるの明旦官兵此大櫃を
 擔ひて國王の前小至り是を問う我れ我れ僧の身なる言
 けりも一万の教小加へく殺さる今なぞと是を道んやと悲心
 めを行者師父を諫て曰く師父友心あり我れ一固の計策
 ありと傾て耳の裡より金箍棒を把出し覺て鋼鑽と彼大

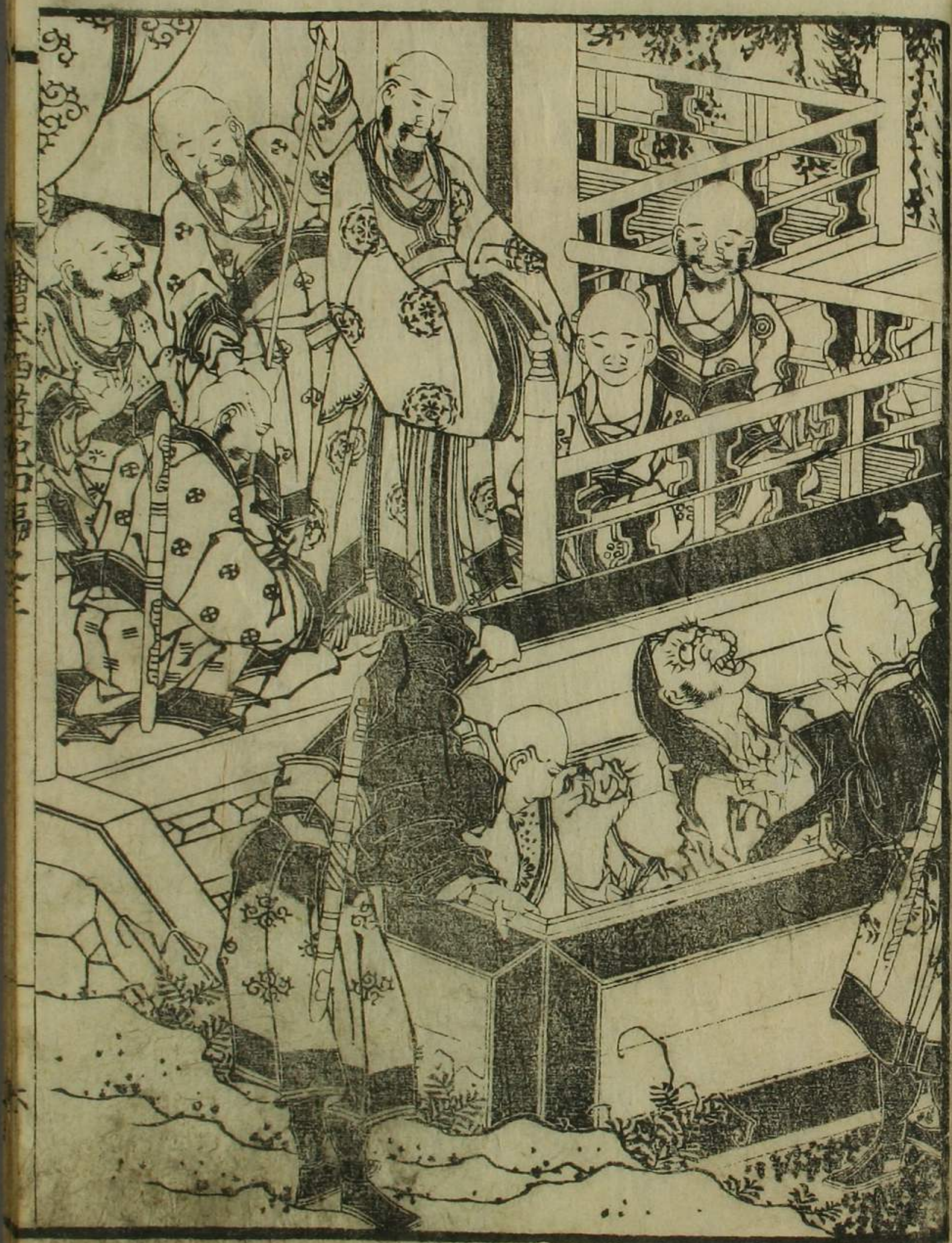
櫃の底小孔を接穿身を揺る蟻と覺る這孔より爬出く總
 兵府の戸の透間より外面小出本相を現し雲小駕り飛行皇
 宮殿の裡小下り大分身普會神法を使ひ左の臂上の毫
 と盡く抜下り口より仙氣を吹蒐幾千の瞌睡虫と覺るさせ
 唵字真言を念て當方の土地神を呼出し這般師父の難
 を語つと你们我助力させよと彼瞌睡虫を殿中小放さむ土地
 神命を受く行者と俱に彼瞌睡虫を皇宮内院五府六部各
 衙門大小官員の宅内都て口吐職在者の顔に盡く一隻づ
 放さむ原末夜陰の事と云彼瞌睡虫顔小住さる者ど
 も前後も知れ熟睡して奈何も覺らざり行者又右の
 臂上の毫を若干採取数千の小行者と覺らさせ鉄棒を出

一 幾千口の刺頭刀と髪をまき一個の小行者毎小刺頭刀一
口づ持せ皇宮内院五府六部各々臥室小入る國王と上
首后妃宮女大小の官員們が髪を盡く剃落さむお数千
の小行者数千人の髪を剃落殿中若干の比丘尼和尚を
作做せし行者勿心ち身と揺つて小行者も瞌睡虫も皆原
の毫小返下左右の臂上に收め刺刀兎を原の鉄棒と做耳
の中小藏納土地神と返す雲小駕で總兵府小飛飯又
蟻蟻と髪下扉の縫兎より裡小入彼大櫃の底の穴より這入
て師父小此由と説話八戒沙僧も是を聞て暗小笑ひ居る
と云り却説翌旦に至り内院の宮妃睡を覺し平生より頭冷
く覺えたる小ど手と轉て頭上を撫て見を是奈何勿心ち髪を

剃ひ一個の比丘尼と成居る小ぞ大の小鷲さ哭さる心小
了髪を呼々むと阿と噫て出来る髪を見れば是も同く
毛髪を剃ひ圓き頭を抱へ涙を流しに出来る偕いと鷲さ又外
の髪を呼小是も猶髪を剃ひ出来る是唯妖怪狐狸の死
をうんと外の宮女輩を問答に那個も皆髪を剃て出来る
も出来るも残らば尼僧の姿より大家鷲さ日悲と云心小官員
們と呼られ出来る官員又是秃子ある是は怖き外のを呼ば那個も々々
皆秃子看々皇宮内院五府六部の裡の男女一個とて毛髪を剃る
都て皆和尚と成る小ぞ許妾の官員鷲さ狼狽抑奈何
妖怪の死をうんと快く君王に羨望しと個々急ぎ入朝する
國王未だ起出ぬれば衆官寤宮小近き呼醒し奉る國王

驚き何幹ゆと出御せしは是亦一個の和尚皇帝ありし衆官
 是と看て増々呆掉呆唯泪を流し都て五府六部各衛門大
 小の官員們俱小皆表章を奉り昨宵殿裡の男女總々皆
 髪を七ひる由を奏聞せしを國王又自己の頭上を撫更小恐
 懼と候ひ女時両手と撫き頭を低嘆息して曰ふやう是朕當
 時許姜の僧を殺しる報ひて天より我を戒め給ふるやう朕
 此後不都小和尚を殺しを止せし能此旨を國中へ触下
 びべしと命とめひくろ衆官此旨を領兼し己小退朝せん為如
 小巡城總兵官と東城兵馬司と連忙々々入朝し昨宵城東小
 て許姜の偷賊小出遇し五十仔細奏聞し彼白馬と大櫃を
 朝廷小幸居る國王是と遂々小聴ひ衆官小命と彼

大櫃を聞しゆ人を裡より四個の和尚現れ出さる國王を衆
 位の官員輩行者八戒寺が異形なる形勢と見て心中深く
 ととぞ抑和尚們的に那國より来たる的と問々を二藏合
 掌して曰く貧僧の東土大唐王の上旨を奉り西天大雷音寺に
 至り佛を拜し經を求るの僧なり昨宵玉城小到りて處小國
 王二万個の和尚を殺しゆの由を兼解斯の如く俗人の摸擬
 に打扮て飯店小宿りし大櫃の裡小隠れを睡候ふを計り偷
 賊の爲小大櫃を盗み出さしと官兵士の手小度りし今又度上小
 至るを得りし万望の君王我門四個を免し西方に却りし
 めが大恩をうん國王是と聞て俄小衆官小命と二藏と殿
 上小登りて竜床と下りて二藏を拜し借由老師父の天明上



滅法國王
三藏師徒
小逢

三蔵法師

國の高僧より朕却て失迎の罪あり曾て此國の和尚朕が行政
 を誹訪するを以て朕就ち誓ひ登り二万僧を殺さん事を要め既
 小九千九百九十六個の和尚を殺しし不期も昨宵宮中の
 后妃君臣皆盡く髪を亡ひ僧形とらむ是則ち天より朕が罪
 を咎めぬ處多しと首て悟り當下佛門小皈依せんと為の處
 あり万望の老師父朕君臣們と門下と做めり國中の財宝を
 以て獻じ奉ん行者曰く我々の徳を積の僧より此二も財寶を
 要は唯死持するの閑文あり万望の階下是を倒換宝印を用
 ひぬ我々と西方小送り出せぬが管に其徳小依て國家安
 全万民快樂を保ち待らん唯此國滅法國と唱る吏感不祥な
 り今より欽法國と号しぬひるを可ららん国王是を聞て大い小推

喜急ぎ衆位の官員們小命を國中に令を下し欽法國と改
 めぬひる二藏師徒も女時殿と辞下り別室に入て法衣を
 更め行者小一棍の毛を抜一個の行者と責トさせ二藏の身切
 小置本身の作夜取来り彼旅客們が衣服頭巾を捨抱に
 隱身の法を使い空中を飛行作宵の飯店の簷端小衣服頭
 巾と投落し又殿中小飛返り一根の毛を身に返り師父と俱小そ
 居りたる國王の二藏師徒を兩日住め万般の素楚を設け丁
 寧に是を管待遂小閑文を倒換り欽法國の印を用ひ君臣
 個々列を止し唐僧四衆を城外小送り出せ七八里を過て別處
 へ

心猿姪木母

魔王計吞禪

三藏師徒の欽法園を跡ふや西小向ひく急ぎたる一時亦一崖
の高山小登つと前面遙小臨とあ人を勿心り山崖の間より一陣の風
登つと怪して看處亦一陣の霧を襲ひ直に半空を單ひ昇る
行者是を看て旦師父と少時待せ置雲小駕て空中小立て山
崖の間を打探看ふ一個の妖精石上小座し左右小二四十個の
小妖圍繞せり行者心裡小思ふやう我今是を師父小告の師父
亦嘗に怖とあらん日八戒を敷て那里へ遣ひ彼妖精們と戦
はせ他們急麼計の手段あるや見べしと頓て雲を下り二藏の前
小至り打笑て曰く我生平の能千里の間を打探見と雖も今
日却て大い小看錯つたり彼風霧の是妖精小あはは這前向小
一村里あり郷中の人家善根を好む一家一家小乾飯を煮て僧

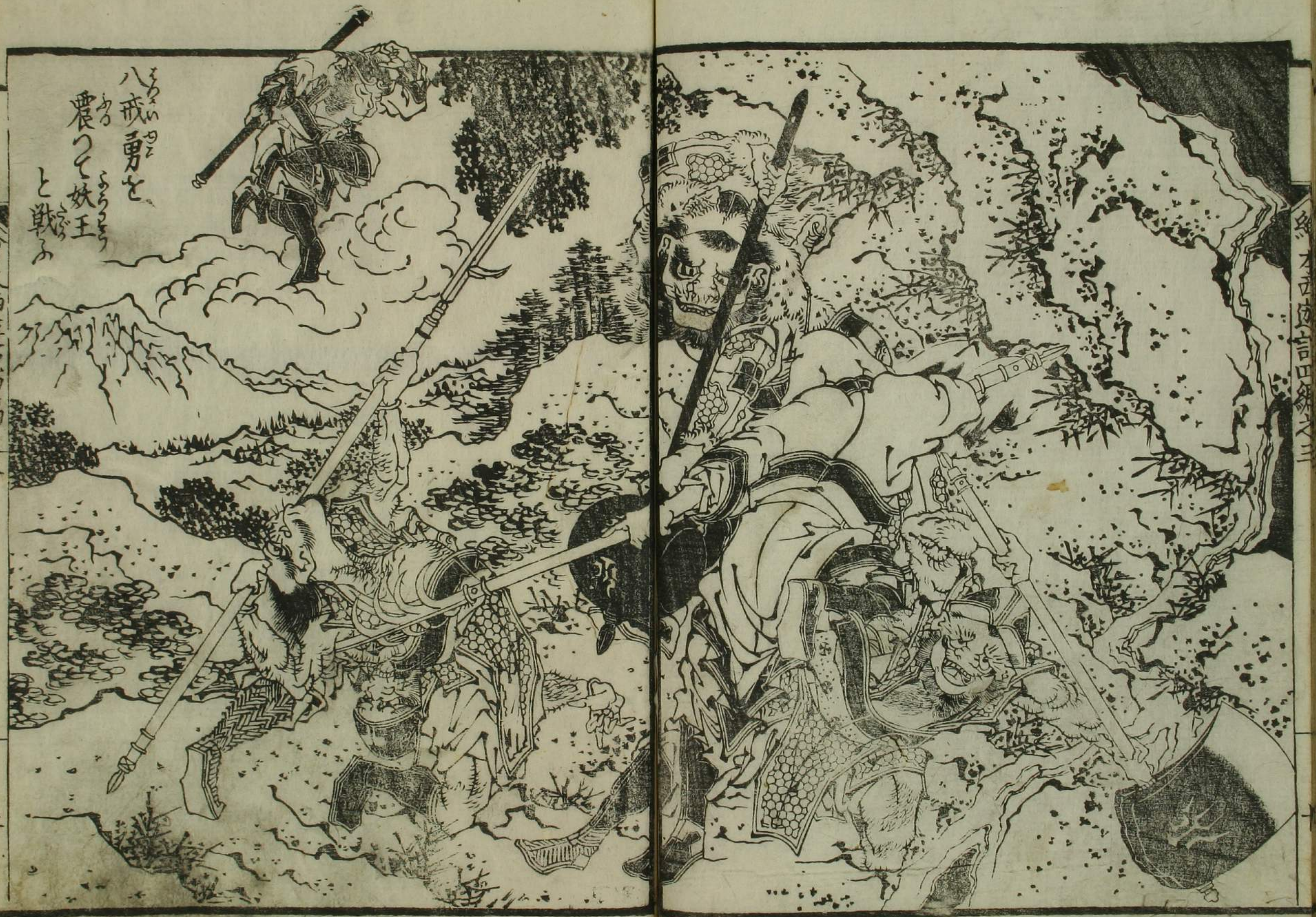
に施にめて候ふ霧と看る人家の蒸桶の湯氣より八戒是を聞
松小行者と一邊小引往長兄今那里の人家に至り齋を吃
て来りやと低語問行者曰く我今日時を吃て来りやと那菜
蔬大に鹹くして煮く吃難く你去て吃ん更を思ふや八戒曰
く我既小飽り快く去て彼日時を吃せんと思ふや長兄師父
小云更らうと行者曰く我師父に云を你一个急麼とて去や
八戒曰く我此二主張ありと云て頓て二藏の前小到り師兄今
前村の人家齋を就て僧小施にと云我那里小去て齋を領
んと思へども此馬却て草料を要め人家の塙を打攪さる可ら
俵僥小今風霧霽ふを大家旦爰小在り待め我去て此
の齋草を取来り馬小飼て後一齋小人家に去て齋を吃侍

かん三藏大いゆ惟懐で曰く你生平と替りて今日能心を用
 の快く草を把来と飼子とて後那里に行へ八戒是を聞
 て計成ると嬉び釘靴を腰中挿て山の凹小跑し行一個の矯
 肝和尚と愛し他原經を念る更を知を口裡に上大人を細言
 木魚を敲き前を行爰小彼妖怪の小妖們小命とて大路小出て
 往来の人を待せざる處へ不爰時八戒前向より来つとらふぞ小
 妖們是を見て一斎小把圍と衣と扯腰を推山崖に扯去んとは
 八戒其手を捨て曰く你们扯住小及むは今我你们が家小
 去て個々の斎を領せんと欲は小妖們が曰く我大王你を合掌て
 蒸熟して吃んこつめふ你却て斎を領せんと云や八戒是を聞て
 大い小驚き儲の他寺の一駉の妖精小て有らるを彼騎馬温我を

數き斎を施は家有小傳りて爰小遣しとて心裡腹る齋を生
 小忽ち本相と現し腰より釘靴を把出し數々小突立ちて小
 妖們狼狽廻り後とも不顧して逃返り老妖大王小斯と報
 じ老妖督て急ぎ一條の鉄杵を取て跪来り八戒を見て喝つ
 て曰く你何的なきを爰小来りし我小妖的を惱らや速に小
 姓氏を名乗と呼つとらり八戒答て曰く我は是東土大唐より
 西天小至り經を取唐三藏の徒弟猪八戒と云者らる你却
 て我を知らるや老妖是を聞答て曰く儲の你的唐僧の徒
 らる我這處小在る你们と待更爰し怎麼饒返しんやと
 鉄杵を拳て打て係る八戒釘靴を輪して是小當つし兩個鼻
 を奪ひく戦ひたり此時行者の師父の後辺に在て乍ち吸々

と笑ひひくを汝僧問て曰く長兄何と思ひて揚笑ふや行者
低語て曰く八戒の真に飲まらう我小敷をて那里に行未
く飯のまららるの極て妖精們と戦ひて在るん我快く往
て看まらる一師父小告る更々々と一棍の毫毛を抜一個の
假行者と愛し假汝僧と並せ置真身の空中小飛昇り山
崖の一邊に到る看バ八戒の許妻の女怪小圍繞と前小防
ぎ後小支へ没命的と戦ひ居る行者是と看て意を二切
八戒不要忙とせ老孫来とらと叫つこらる八戒大の力
を得又更小勇と奮ひく働さける程小遠小妖精を盡く
趨散りけり行者是を得と見届け急ぎ原の處小飛飯の假
行者と身小收め不然体小て師父の後邊小座居る不

交時八戒一身小汗を流し喘息哮的挽回とまじ三藏驚き曰く你飼
料草の要は怎生這様小連忙と問ふまわらる八戒身と振て曰師父
小是と語る其面目多々我師兄の共敷と假小馬飼料と要る
と云ふ那里に去て齋を吃せんと思ひ小却て二殿の妖怪小圍繞と命も危
うぬを亦師兄の助力を得て漸々小脱と歸つとらとりか二藏大の力
怪こそ悟れと向より爰小在て那里小も出さど忘生你小助力
せんや行者大の力小打笑ひ家小以實小仔細と語りて
三藏も汝僧も大の力小笑ひを催しらう行者亦曰く八戒你
今聞路將軍と做て師父を保守して爰を過を此地方一の
大功と假べすと云ふ八戒閉て向小妖精が手段の知らる遂
小是と領掌し然る我師父を保守して此地方を過らんと



八戒勇を
震つて妖王
と戦ふ

繪本西遊記四巻之三

繪本西遊記四巻之三

に進そ山中分入り却説彼老妖大王の洞中小立飯り
點然とて不言座居る洞中の小妖們問て曰く大王生
平に那里より飯を人々を喜びの色あり今日息生這搦小業
とあひさるぞ老妖曰く我久く東土より来る唐僧の肉を吃
う者の長生を得と同日每那里に出待受る小不斯も
今日他が徒弟八戒と云る者小出遇斯の如く敗陣とて逃
還る他が麾下己小這搦の徒弟あり我唐僧の肉を吃ん
と畏懼の今是を憂る者と當下一個の妖怪前と出て曰く
我向小獅駝洞大王の死小在故他寺が車を能知り他が
麾下小三個の徒弟あり一の徒弟と孫行者と呼二の徒弟
の沙和尚といひ彼八戒の二徒弟あり唯怕るさの彼孫行者あり

他神通廣大小能變化を倣五百年前大小天宮を鬧せし
時も普天の神他と降し事能む大王唯他們を急矣小過
くも小如く若唐僧を拿んとせを怕る却て害を引出くも
べ老妖大王是を問て大の小驚き彼猪八戒を今日の手
段あり若孫行者小遇を奈何して是を防んやと愈急色を失
ひる當下亦一妖前と出て曰く大王那ぞ這搦小怕るもや
我一固の計策を設て管は唐僧をと拿候ん老妖曰く你志心
磨る計策を用ひて唐僧をと拿るや彼一妖の曰く且生平に愛
化小能熟る小妖を二個擇出し皆俱小老大王の搦搦
小意下を二處小埋伏させ置一個の孫行者と戦はせ一個の
猪八戒と戦はせ一個の沙和尚と戦はせ置其間小大王の洞中

より手と伸し唐僧と抱めり。裏裡と搦て物を取らば若くも
らん是を号して分辯梅巷の謀計といふ。老妖是を閉て満
心歡喜頓て變化小熟る。小妖と三個見出。三個の假大王
を執做山路の一邊お出張て唐僧の来るを待居。三藏那ど
是を知らん馬と駭めて山深く入り。處小勿心。路傍の樹間より
一個の妖精現れ出。三藏を捉んと。八戒是を看て怒り。曰
く。你響の手段小も尚微心とや。釘釘と拳て突て。蒐る妖怪
の鉄棒を把て是お當つ。兩個大り小戦ひ。さう。麓の方へ下り
る。亦も那邊の樹陰より一個の妖精現れ。出行者を眼的
て打て懸る行者心得ると。鉄棒を把て是をよへ。只管小戦
ひ。さう。遙那里へ隔つ。亦一個の老妖怪木立の茂るを跳

つ。出悟淨を白眼的打て。係る沙和尚宝杖を把て相敵
し。三個二方小離散て没命的と戦ひ居。真の老妖大王へ
半空より是を打探。三藏一個馬上小左に。看定。頓て虚
空より手を伸し。唐僧を扯抓。飛が如く小洞中小飯のり。こ
木母助威征怪物。金公施法滅妖邪。
三個の徒弟們的。遂小妖精を起退け。二方より立帰り。未つと
師父を尋せども。目見えぬ。は行者大い小嘆息。て曰く。是官
に他分辯梅巷の謀計小中。し。さう。我。快。師。父。と
尋ねて救ふ。と。三個一斎小走。さう。さう。這方の山の溪挾小果
然一座の洞府あり。石門の上小雫霧山折岳連環洞と云。八固
の大字を紀。さう。行者是を見て。是妖精が巢穴あり。師父堂

ど這裡小在はぐと云を八戒急小釘鉈を拳て力小儘に築
破りけと彼石門小一固の大窟窟を聞き守門的の小妖
此窟より外面を覗き行者を見て勿心ら起り入て大王小報に
老妖大の小驚き他今爰小追来る志摩して是を防んや先
鋒の小妖曰く我亦一固の計策を設て他を哄敷還まへ他
等若飯の去を寛々と唐僧と蒸熱し受用し久とく兼て
拿吃ひ人の死骸の中より似合れた頭を二個尋出し髪を刺落
し和尚の頭と倣顔の鮮血を塗汚し盤中盛て門口小持行
高く嘯つて曰く大聖爺々轡を止し我告に幹と閻め我
大王唐師父を帯飯のゆへ處洞中の小妖们何の道理も辨
へば是に是と奪ひ合て你一口吾一口と遂に唐師父を食尽し唯

一個の頭を吃餘し今大聖に是と飯一奉る取還りて葬送
しを活業多くと八戒が築破する石門の窟の中より彼頭を投
出さるる行者是と看よりも借の師父已小亡びひりりと
色を放ちて哭さるる八戒沙僧も一斎小哭倒し少時前後も
知さるる八戒泪を著て曰く長兄我们且師父の頭を埋
供養を倣然して後哭さるる行者曰く你賢くも説得たり然
ども那里の葬らん八戒曰く我小儘せあへと穢汚をも嫌に
彼頭を懐裡小抱き山崖小跑登り釘鉈を把て坑を穿り師
父の頭を埋し上一固の塚と築き幾條の揚柳を并て墳塚
の左右小挿亦幾塊の印石を拾ひて塚の前小積此柳を推
の松拍と倣師父の墳の頂を遮り覆ひ此印石を権小點心と

做て供養を為すと亦雨々と哭居る行者曰く哭くは却て
小事なり汝僧の爰小在て墳と行李と白馬を看守よ我と
八戒と今より洞府を打破り妖精を拿て屍を裂師父の體言
を報にべと兩個一禽小洞門小跪し到る守門的小妖們
是と看て大王小斯と報に老妖是を聞て急ぎ許方の小妖們
を引領喊の音を暮て打出るを行者の鉄棒を輪へ八戒を
釘釘を揮ひ此女も猶豫に直に羣妖の中へ跪入四角八面小
打て廻る許方の小妖們少時の拒と戦ひ々々とも兩個が必
死の勇猛小何れ以て敵難く打殺さるる数的數を知り遂小四
方小散乱して老妖を上首とて去方知に逃散るる行者八戒
尚も洞門小進とる小偕も這石門弥々上小大石を疊置重

ね入る透間も有きるを行者曰く偕へ他們今戦ひ存
間小斯や石を積ゆるん一旦墳の處小皈りて商議を做べ
ると兩個打列悟淨を待居如小立飯りしは行者亦云や
他們前門を塞だるる那里へ逃散るるの極めて後門有く
洞中に入らる小疑ひる你們兩個爰小在て女時寺で我日
洞の後邊を打探来らんと頻て身を轉じて赴り去山の後邊
小輪り過むを果的一帯の澗水膝々と流れて洞の岸邊小
一座の門有門の辺小一固の暗清あり清の中より紅の水流と
出る行者則ち一個の水氣と爰下清中小潛り入裡の消息
を打探るる小爰小幾個の小妖們人の肉を斬て晒居る這
小血流して紅の水とるむし行者是を見て彼肉の中小我



悟空の妖怪が
洞門を穿て

孫悟空の妖怪が洞門を穿て

師父も居あつらん漫小涙を催く亦身を棄て飛蟻
とあり中堂に飛去るを彼老妖床の上小座へ黙然とて
在るる乍ち一個の小妖入来り跪下て曰く大王千万の惟喜
あり必百愛いあふ更なると老妖曰く惟喜といふ意度あるを小
妖曰く我當下後門の外の澗の一邊小て人の哭声を聞急小
山上小登りて打探看小唐僧の徒等們一固の墳の前小拜
て痛哭と居る想ふ小他們向の頭と真の唐僧と思ひ是
と埋て墳を築きくる者ぞん行者是を聞て思ふやう今小妖が
云處と思ひを嚮の正しく假首小て師父の還て遠洞中小悪
く置て未と吃さると覺る我日師父を尋ねて見と中堂を
飛出爰那如尋廻せば爰に一個の小門あり緊く閉て隠れ

この行者則ち透間より潜り入て飛行ハ一葉の大樹の下小西
個の人を網縛置る一個の果的唐僧あり行者是を看く推
嬉の余り勿ち本相を現し師父と一舌呼々を二藏夢の醒
る如く悟空快く我を救へと曰ふと行者住めて曰く師父
去と潜めぬ身辺小人あり若這消息を漏さる或ハ師父を救
ひ難らん二藏曰く苦うは這人の此山下の樵夫あり唯母と娘
と他二個住むと云つと他家より向小妖精小捉らむと爰小在
你他とも一齋小救之行者曰く師父少時待多我再
ひ妖精が動靜を打探来るべくと亦飛蟻と變じて中堂小
飛至し打探るを此時許妻の小妖輩紛々嚷々とて堂
上小在或ハ唐僧と着んと云ふあり亦蒸熟して吃んと云ふあ

つ或の塩小醜んと云も有て万般と商議最中より行者是
 と聞て心裡小怒り我師父他們と何の仇もなき意慮這様
 小師父を乞んと為やと頃て堂中小飛入暗小一把の毛を抜
 許方の瞋睡虫と言ふを女措筆が面小放ち遣を許方
 の小妖乍ち一奇小睡を催し眼を摺欠を候個々座睡倒と
 々る行者又一个の瞋睡虫を老妖が臉小放ち遣を不交時老
 妖も亦卧倒と刺を奔し前後も知れ熟睡より行者多心死
 師父の處小飛行本相を現し閻鎖の法を行ひて小門を排
 き三藏の細縛を解て援け下し彼推まも俱小繩を脱下し情
 情小後門へ導引出山を轉て舊の處小飯と々を八戒驚の
 曰く汝僧你看よ師父魂を現し迷ひて我れを尋まりぬる行

者曰く歎子乱説と云まると師父曾て死ぬれば那を魂を
 現しぬらん汝僧急ぎ師父の前小跪下て曰く師父那裏小控
 のして居ぬひや長兄長慶と救い来つとるど行者則ち洞中
 の動靜亦推まらまを仔細説話とせば八戒聞も敢て上
 へ釘釘を取て彼墳と築崩し頭と穿出し微塵に碎きて捨
 てたり行者則ち師父を安座おれ我亦去て妖精を合手へまん
 とて頃て亦後門小轉し到つと直小中堂に入たり小妖怪一個
 も眼覚め的々皆熟睡して居たり行者一條の繩を要め
 老妖を細縛鉄棒小扯搦て肩小負て石崖の下に飯りたり八
 戒見より飛鬼つと畏る小築殺は老妖絶小目の開けとも手
 豆を縛し身を揺り変能つば遂小八戒小殺さすを一個の豹子精

油漬

と成なりてなり行者ぎやくわ亦また彼か推おし夫を小こ分ぶん付つてて数かず束たばのの柴しばを取とりまらせ八はち戒がいのの命いのちと
 てて後ご門もんと埋うめめと塞ふまふりて行者ぎやくわ身みと揺ゆ揮ひてて瞌く睡すい虫ちゅうと毛け小こ返かえりて身みのの裡うち小
 收こめめ火ひを放はなつて柴しばと焚た火か立たして一ひと斎さい小こ燃も昇ありて洞どう中ちゅうのの小こ奴に們ども睡すい
 と醒さめめ脱だして出いでで小こ前ぜん門もんのの石いし小こ積つりて有ありて後ご門もんのの猛まう火か成せい盛せいん
 小こ燃も立たして二ふた個こも脱だして的てきのの不ふ残ざん呼よびて死しらるるる三さん藏ざうのの再さい三さん徒と
 等ら們らがが苦く辛しんと謝あままりて馬うま小こ乘りて出いでて人ひとを彼か推おし夫を小こ前ぜん行ぎやくと且かつ我が
 矮わい屋え小こ導どう引ひ入いれて老らう母ぼと呼よびて這あらる由よしと話わ談だん此こ四し位ゐのの老らう佛ぶつ菩ぼ
 薩さつのの我が為ためのの再さい生せいのの父ちちと云いふと云いふ老らう嫗おんなも娘むすめ兒こも立たち出てて個ひと々々四
 衆しゅうと礼らい拜はいして是これを下くだりて西せい天てん極ごく界がいままで千せん里りのの遠とほくく小こ過とほびて少せう時じ亦また舎しゃ小
 豆まめを安やす散さんて往いくべしと慇いん懃しん小こ抱かかりて素そ飯はんと安やす排はいて管くわん待たい然ぜんと
 後ご四し衆しゅうと大だい路ろ小こ間かん路ろ五ご六ろく十じゅう里り送おくりて来きりて泪なみだを押おして去さるる

